

海原純子 東京・銀座“Swing”, 12月11日(土)



■ Set List 1st: ① イット・マイ
ト・アズ・ウェル・ビー・スプリング
② エヴリシング・ハプンズ・トゥ
ミー ③ ギブ・ミー・ザ・シンプル
ライフ ④ クワイエット・ナイト ⑤
ビバップ・リヴズ(バップリシティ)
⑥ O Conto Das Nuvens(雲の
物語) / 2nd: ⑦ 枯葉 ⑧ ワルツ
フォー・デヴィ ⑨ デヴィル・メイ
ケア ⑩ ゼン・アンド・ナウ ⑪ 雨
の日の天使 ⑫ スマイル〜デイ
バイ・デイ Encore: ⑬ アンリ・サ
ルバドールに捧ぐ

■ Personnel 海原純子(vo),
若井優也(p), 楠井五月(b), 海
野俊輔(ds)

若井優也トリオとコロナ禍でのアルバム制作を通し、互いに築き上げて来た強い信頼感

本誌ジャズ・コラムでも人気の、現役心療内科医にして医大特任教授、ジャズ・シンガーでもある海原純子が、12月半ばに拠点の一つである銀座“Swing”で、新作『ゼン&ナウ』発売記念ライブを行なった。このコロナ禍、現役の医師だけに最大限の注意を払って…と言うことで、発売から大分時間は経ってしまったが、今回漸くライブの実現となった。どうやら人前で歌うのは久しぶりの様で、やはりそれなりの緊張感あり…だったが、そこは流石に貫禄の唄いっぷり。何よりお客を前にその反応を確かめ、触発されながら歌える…というのは、歌手冥利に尽きるというもので、その喜びが直に伝わってくるライブでもあった。その上この日はTV番組の取材も入り、客席には彼女の歌声を、“品のいいやさぐれボイス”と的確に表現した、直木賞

作家の桜木紫乃氏の姿もあり、それらもプラスに作用し彼女の気構えも充分、かなり充実の歌唱を披露、客を魅了してくれた。コロナ禍だけに45分程2セットという、短めのステージだったが、バックを務めたのは共演歴も長く、彼女が最も気に入っていると言う若井優也トリオ。コロナ禍での厳しい条件下でアルバム制作を通し、互いに築き上げて来た強い信頼感を感じさせる所も多々あった。

1stは、デビュー作に入れたマット・デニスの〈エヴリシング・ハプンズ・トゥ・ミー〉や、この所積極的に取り組んでいるバップ・チューンのヴォーカリーズ〈ビバップ・リヴズ〉などを、テクニカルに情感豊かに熟し、自作のボッサ〈雲の物語〉で鮮やかに印象深く閉める。2ndはベースの楠井五月のアルコ・ソロに導かれ、彼としばし対話を交す、一寸意表を

突くアプローチも新鮮な〈枯葉〉でスタート。「ギア・チェンジしたかな…」と思わせ、大好きだと言うボブ・ドロウの難曲〈デヴィル・メイ・ケア〉等にも果敢に挑戦、澆漣とした姿を印象付ける。続いて日本語で歌われる〈雨の日の天使〉、アカペラで始まる〈スマイル〜デイ・バイ・デイ〉の卓抜なオーラスのメドレーという、この日のハイライトへとなだれ込む。こうしたクライマックスの現出、まさに“物語を巧みに綴る歌者”、海原純子の真骨頂とも言える見事さ。アンコールは敬愛する歌手〈アンリ・サルバドールに捧げる〉洒落な自作オリジナル。「いくつになっても夢を見るの…、女はいつも物語の主人公」。まさにこの夜の彼女を象徴している様な、素敵で熾惑的な歌詞。彼女の精進振りも伺える、中々に好印象のライブでした。(小西啓一)